

西穂高岳へ

岩井 淑

昨夜の雨も凄い降りだった。今夏は例年よりも9日早い梅雨明け以来、記録破りの猛暑が続き、まったく雨が降らなかったわけだが、ここに来て2日続けての降りである。

もっとも一夜明ければスカットした青空が広がっているので登山者にとってはまことに喜ばしい限りだ。今日も快晴である。

西穂高山荘の横からこんもりとハイマツの生い茂る中を西穂高岳への登山を開始する。右下側には梓川の流れと上高地の地形が箱庭のように展開している。帝国ホテルの赤い屋根も緑の中に鮮やかに浮かびあがっている。その梓川をはさんで六百山と霞沢岳が堂々と聳えたっている。左側には蒲田川をはさんで笠ヶ岳から抜戸岳へと連なる山々が乾然とたちあがっている。あんたもえらいよ、と思わず声をかけたくなるほどである。

岩場と鎖場が登場すると頂上が楕円形をした独標への登りだ。ここでスリップしたら大怪我だろうなあなどと思いながら登り詰めると、西穂高岳山頂へ次々と続いているピークが重なりあいながら遠望できる。15人前後の登山者がぐるり360度の展望に満足の笑みをもらしているが、山頂へのコースはこれからが正念場となっていくのだ。10m程の岩場を慎重に伝い降りながら、どうも早朝は調子がでない、体が固くなっているなどと一人ごちる。これから山頂までの道は完全に岩稜であり、岩場の連続である。独標から西穂高岳山頂までに大小13のピークが存在しているといわれているが、これらの頂を右に左にトラバースあるいは乗り越えて山頂を目指す。なかでもピラミッドピークと呼ばれているものは緑のハイマツに覆われたとりわけ立派な頂である。

次々に13ものピークを越えて行くのだから、西穂高岳山頂に立ってはじめて、アッここが山頂かと思う感じである。縦走路は更に天狗の頭からジャングルムを通して奥穂高岳へと続いている。山頂に立つと今まで影に隠れて見えなかった槍ヶ岳が初めて眼前に雄姿を現す。いつ見てもオイラが大将だといわんばかりに、その尖頂を天に突き上げている。穂高連峰をあるいは北アルプスを代表する孤高の姿はいつ見てもいい眺めだ。固く黒々とした岩塊は一本の草木の存在も許さない岩だけの世界でもある。

ザックを西穂高山荘に預けて空身で登って来たので疲れは全く感じられない。快調である。360度の展望の中で後方には赤茶けた岩肌と噴煙の上がる焼岳から乗鞍岳が望め、左側には笠ヶ岳から抜戸岳、弓折岳が連なり、前方には穂高連峰の中核部である槍ヶ岳から奥穂高岳が重なり合い、右側には六百山から霞沢岳が見事なスカイラインを描いている。これらの連峰を眺めながら、奥穂高岳へのザイテングラードの道、ボルト頼りに強引に登った槍ヶ岳、あるいは汗びっしょりになりながらの笠ヶ岳への登頂などの思い出にしばし感慨にふける。

20分程山頂に佇んでいると大阪からやってきたという若者4人組が登場したので、さっそくカメラのシャッターを押してもらおう。初めての登山なのによくここまでこれたよなあー、などと語り合っている。闊達な若者たちだ。

1994.8.7. 記